

## 就職活動体験記 —特別支援学校教員—

子ども発達学科 学校教育専修4年  
佐藤優(さとう ゆう) 高蔵寺高校

私は、幼い頃から子どもと関わる仕事がしたいという思いがあり、教師を目指すようになりました。特別支援教育に興味を持ったきっかけは「光とともに」という本です。日本福祉大学で特別支援教育について深く学んだり、教具や教材を工夫した授業づくりの楽しさを知ったりすることで、特別支援学校の教員になりたいと強く考えるようになりました。私は、地元である名古屋市の特別支援学校教員の枠を受験しました。一次試験の対策としては始めに過去問を解きました。その後は教職教養、一般教養、専門の分野ごとの問題集をたくさん解きました。勉強は、家でやると誘惑が多く集中できないので、大学に行って、図書館や自習室で行うようにしました。同じ夢を持って一緒に勉強している仲間もいるためモチベーションを維持しながら行うことができました。また、長時間だらだら行わないようにしました。長時間行くと結局集中力が切れてしまうので授業で大学に行った日の授業終わりに必ずやるようにしたり、忙しくてやれない日でも一問でも解くことを意識して取り組みました。二次試験の対策としては、大学側が開催してくれる面接講座に参加したり、ゼミの先生に個別に面接練習をお願いしたりしました。面接では、自分自身について話すことが多いと思うので、大学生活の中で自信を持って話すことができるように積極的に学内や学外の様々な活動に参加することを意識しました。講演会や、シンポジウムに参

加し現場で働いている教師の方や、色々な職種の方の考え方を聞くことで、自分自身の考えも深まっていき、自分の教育観などが膨らみました。試験当日の面接では、自分自身についての質問で様々な角度から深掘りされることが多かったのですが、自信を持って話すことができました。卒業後は、日本福祉大学で学んだ授業づくりの楽しさを実現できるように教材研究をしつかり行い、1人ひとりに合わせた教具や教材を作り楽しい授業ができる教師を目指したいです。

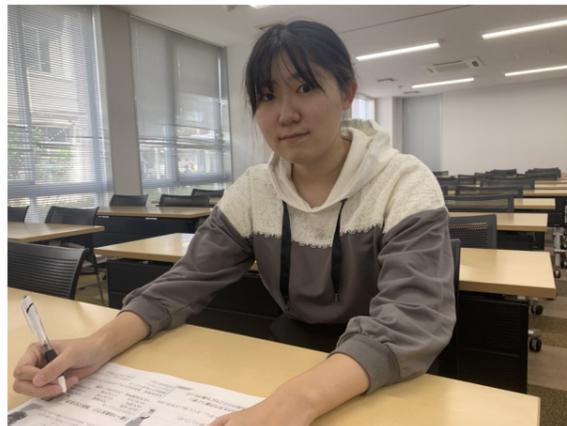


## 就職活動体験記 —保育士・幼稚園教諭—

子ども発達学科 保育・幼児教育専修4年  
間瀬いづみ(ませ いづみ) 日本福祉大学付属高校

私は、自宅がある地元の自治体から、幼児教育士(保育士・幼稚園教諭)として内定をいただきました。内定をいただくことができた理由には、様々な経験を積み、しっかりと準備を行ったことがあると考えます。大学入学当時から、自分が育った地元の幼児教育士として働きたいと考えていました。しかし3年生になり就職を考え始めると、周りの学生との経験や技術の差に気が付き、焦りを感じてしまいました。そこで3年生の春に、勇気を出して保育補助のアルバイトを始めました。実際に働いている幼児教育士の姿を見たり、子どもと関わったりすることで、学びと実践を結び付けることができ、より職種について理解することができました。また、子育て支援センターでのボランティアにも参加し、様々な親子と関わったり、保育の技術を身に付けたりすることができるようになりました。そしてこれらの経験を積んできたことで、就職活動の履歴書や面接、作文などにおいて、積極的に自分自身をアピールすることができました。3年生の末には、改めて地元の自治体で働きたいか、自分に合っているかを明確にするためにホームページを調べたり、自治体が開催した職員採用説明会に参加したりしました。そのことで、より幼児教育士として働いていくという意思を強くもつことができました。またどのように就職活動を進めていけば良いか分からなくなった際には、大学のキャリア支援で行われている個人面談や支援行事に何度も参

加して、多くのアドバイスをいただきました。こうした経験を通して、履歴書の書き方や面接でのマナーなど、自分が抱えていた不安を解消することができ、安心して就職活動をすることにつながりました。今の自分があるのは、焦りを感じながらも経験を積み、しっかりと準備をしてきたからだと考えます。今後も大学生活で得たものを活かし、社会で活躍できるように努力していきたいと思っています。



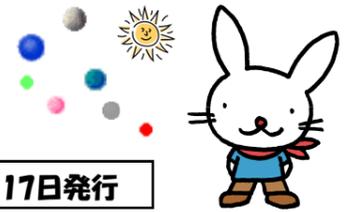
## 編集後記

25号は、9月以降の後期の大学生活を中心にお伝えします。学生達のゼミ・サークルなどの研究や活動の成果を表現するために熱心に取り組んでいる姿を、また現場での実習や、学んだことを社会に生かすために就職活動に取り組む姿をご覧いただき、本学で培った福祉への意欲を感じ取っていただければと思います。(編集長)

# 日本福祉大学

## 教育・心理学部ニュースレター

第25号 2025年2月17日発行



### この号の主な内容

- ・保育実習体験記 —施設実習—
- ・小学校教育実習体験記
- ・教員紹介 —子ども発達学科 笹谷先生—
- ・教員紹介 —心理学科 矢崎先生—

- ・わたしたちの授業を紹介します —心理演習—
- 1 ・サークル紹介 —大道芸サークルBoochi Box—
- 2 ・就職活動体験記 —特別支援学校教員—
- 4 ・就職活動体験記 —保育士・幼稚園教諭—

## 保育実習体験記 —施設実習—

子ども発達学科 保育・幼児教育専修4年  
矢崎琉晟(やざき りゅうせい) 下諏訪向陽高校

保育士になるためには、保育所での実習だけではなく、施設にも実習に行きます。保育士を希望する全員が出かける必修の施設実習(3年6月)と保育所実習か施設実習を選んで出かける施設実習(3年11月)があります。僕は、昨年3年の時に、児童心理治療施設に実習に行きました。児童心理治療施設は、心理的な傷つきを抱えた子どもたちと一緒に生活をし、子どもたちの目指す目標を達成できるように支えていく施設です。敷地内で完結する子どもの生活を子どもにとって不自由なこともあるが、地域の学校に通う児童養護施設とは違い、分校と生活する施設とで連携しながら子どもの生活を支えていることの意義を実習で感じました。実習の中で、職員の方が得意なことでクラブを開かれ、子どもが楽しめる企画を用意されていることを学びました。手芸クラブや知り合いの方を呼んでダーツ体験などをされていました。体育館を開けて子どもたちがバスケやバレーをすることもありました。ゼミで取り組んだ施設見学の機会には、他県の児童心理治療施設に行きました。そこは、実習先のような大人数の子どもたちが一緒に暮らす施設ではなく、8人

くらいの子人数で生活するユニットがいくつもある施設でした。子どもたちは学校に行っていたので、そこで暮らしている子どもたちの様子はわかりませんでした。僕としては、大きな施設でたくさんの大人が多くの子どもたちと関わり、支援する環境に魅力を感じました。実習中に印象に残ったことは、お風呂掃除です。大人数の子どもたちが入るお風呂は大きく、浴槽の側面を洗うのは腰が痛くなりました。ただ、子どもたちがお風呂に入った際に、「お風呂きれいにしてくれて、ありがとう」と言われて、子どもたちの生活を支える楽しさややりがいを感じました。実習をきっかけにその施設でアルバイトを始め、この先も働きたいと思い、就職を決めました。



## 小学校教育実習体験記

子ども発達学科 学校教育専修3年  
吉田晴陽(よしだ はるひ) 岡崎特別支援高校

私は、脳性麻痺があり両手足麻痺に加えて、車椅子を使用しているため、小学校教育実習を今年度(今年度)にエレベーターが付いた母校の小学校で実習を行わせていただきました。この小学校実習を行うにあたって、新設されたエレベーターに車椅子が乗れるのかどうかを確認するために、大学の先生方と一緒にエレベーターの設計図を基にシミュレーションを行ったり、実習校に伺いエレベーター、多目的トイレの確認や授業方法、机間指導の方法について相談をさせていただいたりする等、事前に準備を行い実習に臨みました。いざ実習初日を迎えると、子どもたちに出会えるワクワクする気持ちの反面どんな反応をされるかな、受け入れてもらえるか等の不安な気持ちもありました。しかし、子どもたちは私が自己紹介を終えると「先生はどうして歩けないの?」と聞いてくれました。私を見たとき驚いたはずなのに聞いてくれたことがとてもうれしくしっかり答えようという気持ちになり、歩けない理由を答えると子どもたちは笑顔で「そうなんだ!先生、休み時間鬼ごっこしよう!」と返してくれました。その後、子どもたちから私が車椅子を使用していること

を考えて歩き鬼ごっこを提案してくれて一緒に遊び、この他にも実習期間たくさん子どもたちと接することができました。授業においては、国語、道徳の他に総合的な学習の時間に、福祉学習の一環として障害についての授業を行い、子どもたちは多くの質問をしてくれました。実習校の先生方や子どもたち、大学の先生方にご協力いただいたことでとても充実した教育実習を行うことができたと思います。私は今後もこの経験を大切にしながら教師になるための努力を積み重ねていきたいと思っています。私のように障害のある学生が健常の学生と同じように教師を目指し、実習を行える環境がより多く整備されることを願っています。



## 教員紹介 —子ども発達学科 笹谷先生—

子ども発達学科 保育・幼児教育専修4年  
佐藤美乃梨(さとう みのり) 浜松開誠館高校

笹谷先生は声楽を専門としています。保育専修での授業では、ピアノと歌を教えてくださいました。保育士を目指している学生でピアノが弾けなくても大丈夫です。笹谷先生から丁寧に手の使い方からリズムの取り方などを教えていただくことができ、一生懸命練習すれば弾けるようになります。弾ける子は実践向けに丁寧に教えていただき、保育現場で安心して弾き語りができるようになります。ただピアノを弾くのではなく、一緒になって音楽を楽しむことの大切さや、子どもたちに届くようやさしく歌うことの大切さを学びました。卒業発表会にて、昨年先輩方は、《オズの魔法使い》のオペレッタを行いました。笹谷先生の指導のもと行われたオペレッタでは、先輩方は、発声の練習から始まり、歌やダンスなど全身で音楽を表現している姿はとてまかつよく、子どもたちだけでなく、私たちも楽しむことができました。《オズの魔法使い》の世界に引き込まれ、私たちもこんな音楽活動を行いたいと感じました。舞台を一からゼミの仲間で作上げる姿を見て、とても勉強になりました。子どもたちを楽しませたいと言う思いは、舞台を作る中で、とても大切だと感じました。今年度私たちは、奥田保育所の子どもたちに向けて音楽コンサートを行います。それに向けて楽譜作りから始まり、今は笹谷先生の指導のもと、パーカッションのリズムの取り方や鍵盤楽器の演奏の仕方など、専門的な演奏技術を磨いています。ゼミの仲間と息を合わせてリズムのブレをなくしたり、

強弱を意識したりしながら音楽の奥深さを学んでいる最中です。私たち学生だけでは曲を完成するのは難しく、そんなとき笹谷先生は気軽に相談にのってくださいます。音楽のことや、学校生活のことなど、お話ししたり相談したりすることができます。笹谷先生に教わったことを生かしながら残りの2ヶ月より深く音楽に向き合い、子どもたちに面白かった、楽しかった、音楽って素敵だなと思ってもらえるように頑張ります。



## 教員紹介 —心理学科 矢崎先生—

心理学科3年  
小出遥香(こいで はるか) クラーク記念国際高校

矢崎先生は社会心理学や教育心理学、キャリアや消費といった心理学の中でも私たちの日常に近いものを専門分野とされている先生です。授業資料は分かりやすく、ハキハキとした声も聞き取りやすい。学生との接し方についても、近すぎるわけでもなく遠すぎない適切な距離感。そんな先生なので講義や性格共にとても人気が高い方です。今年のゼミ生は3年生9名、4年生12名で、選択理由の多くは就職希望の人や先生の専門分野で卒論を研究したいという人です。それ以外にも、個人的に先生と関わる機会があり、そこで先生が好きになり希望するという人もいました。矢崎先生はゼミ選択のオリエンテーションで、「私はゼミ生には厳しくなる」とおっしゃっていました。できるキャリアウーマンのような雰囲気とその発言に一抹の不安を抱えながら始まったゼミ生活。どんな厳しい言葉が飛んでくるかと思ったら、出てくるのは誉め言葉と分かりやすい改善点。思っていたものとは(いい意味で)違うものになり、どこまでも学生に寄り添ってくれていると強く感じる事の出来るゼミです。そんな矢崎ゼミは興味のある論文購読をはじめとしたグループワークがほとんどです。メンバーや先生とのコミュニケーションが重要になるものですが、先生のフランクさに影響を受けてメンバーとの会話に緊張はありません。分からないことや間違った解釈をしても絶対に良かった所を褒めてくれます。できなかった事を責められたり、厳しいダメだしがあることは無いのでモチベーションが下がることはありません。厳しいのはメールマナーだけ。自分の考えや意見を否定される事はなく、むしろ

どんな事でも積極的な発言を良しとしてくれるので、発言することに対する恐怖感や緊張がなくなります。また、学生が何をしたいか、何が必要になるか考え、私達にもはっきりと言葉にして伝えてくれるからこそ、コミュニケーションの大切さを普段の活動から感じる事の出来るゼミです。今後も先生の元で多くの事を学び、今後の活動や卒業後に生かしていきたいと思っています。



## わたしたちの授業を紹介します —心理演習—

心理学科2年  
西萌華(にしもえか) NHK学園高校

私は心理演習の授業で「大規模地震が起こり、多くの地域住民が日本福祉大学の体育館に避難してきた」という想定のもと、学生が避難住民のサポートにあたる場合、自分たちに何ができるか等について考えることをテーマに学習に取り組みました。美浜町役場防災課職員の方のお話の中で、職員の方が「避難所の設置は役場が行うが、運営は住民同士で行ってもらおう。運営に役場はほとんど関与しない。なぜなら行政は他にしなければならないことがあるから。」とおっしゃっていたのが印象に残っています。私は正直、何かあっても行政が全てなんとかしてくれるだろうと思っていました。しかし、災害が起きたら行政も被害を受けます。その時に最初から公助をあてにしてしまうと、行政としての役割が全うできず、結果支援や救助が行き届かなくなるかもしれないことを聞き、まずは自助と共助でできる最大限を知ろうと思いました。また、日本福祉大学は津波発生時の避難所として指定されていますが、地域住民には日本福祉大学内の構造が分からない方もいると思います。その時に私たち日本福祉大学の学生は、共助として避難誘導や、配慮が必要な方の手伝いなどを行うことが大切になってくると考えます。私は日本福祉大学に入学するために美浜町に引っ越してきましたが、この授業を通して美浜町で起こり得る災害は決して他人事ではないことを実感しました。避難経路も、避難後に必要な物も人によって異なります。災害への備えは行政に

任せきりにするものではなく、一人一人が自分に合った備えを行うことの重要性を学ぶことができました。またそれと同時に、学生が近隣住民と連携して避難誘導や避難所運営の手伝いを行うことが、災害による被害の軽減やいち早い復興に繋がることを学びました。私たち学生は、自助と共助の意識を持ち、自分にできることは何なのかを考えながら行動することが大切なのではないかと思います。



## サークル紹介 —大道芸サークルBoochi Box—

心理学科3年  
杉浦萌斗(すぎうら もえと) 名城大学附属高校

「あなたに一芸を」  
私たち「大道芸サークルBoochi Box」は、ジャグリングやバルーンを用いた大道芸を行う活動をしています。現在、1年生から4年生の30人ほどが授業の空き時間などで活動しています。練習の仕方は人それぞれで、ゆる〜くやっている人もいれば大会に出場できるレベルの人もいます。例えば、ジャグリングや中国ゴマ、皿回し、マジック、バルーンアート、シガーボックスなど幅広い道具を用いてそれぞれのペースで練習しています。練習の成果は、半田キャンパスの七夕祭や美浜キャンパスの大学祭で披露するほか地域のイベントや近隣の福祉施設などでパフォーマンスを依頼されることもあります。今年度は、東浦町で行われている於大まつりの於大城ステージ企画に出演させていただくなど多くのパフォーマンス依頼がありました。於大まつりは、おだいちちゃんという東浦町のマスコットキャラクターと一緒に大道芸をするという内容でパフォーマンスを行いました。このように実際に働いている方と同じ目線でゴールに向けて動く機会が多いです。また、私たちのメインの活動は大道芸ですが、それ以外の余暇活動も充実しています。サークルとして企画をしているものもありますが、個人でやりたいことや楽しそうなことを企画しサークル内で参加者を募っているものも多いです。例えば、あえて冬に花火をやるよ！という企画や事務用椅子で公道を走る「イス1グランプリ」に出よう！という企画にもチームで参加したりなど多様なものがありました。弊学にはボランティアサークルや体育会系の部活などがあります。私たちのサークルはそのどちらの要

素も兼ね備えていると自負しています。誰かを思って楽しませることも、高い目標に向かって努力することもできます。「Boochi Box」は、挑戦と創造の場です。新たな体験をすることで自信とスキルを磨き、個性を最大限に発揮できます。あなたの情熱とアイデアが、新たな風を吹き込むことを期待しています。

